

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

桜島、やつぱり静かなり

～鹿児島紀行（其の三）～

里見 吉英

施設見学、講演と鹿児島での日々は過ぎてゆき、とうとう最終日。しかし、実はこの三日目にも、旅の大きな目的がある。

ふる里学舎には、椎茸栽培をはじめ、利用者が生き生きと、のびのびと活動できる空間がある。どんなに重度の方であっても、基本的に「働く」ということを理念として

わる利用者の数、実に二〇〇名。必然的に作業種も増やさなければ受けけることは出来ない。そんな中でも里山整備をしながら果樹栽培を行うというのは景観と実益双方に良いだろうと言うことでここ数年職員も頑張っている。木を倒し、穴を掘り、苗を植え草を刈る。実はふる里学舎開所当初から

軽トラックの軽快な先導でグングン山を登っていくと、いつしか道は未舗装になっていく。こちらにはレンタカーなので傷をつけては大変と、慎重にしかし置いてけぼりにならないよう着いていく。周囲に人家もなく、木々に囲まれた山の中にミカンが見え始める。ミカン以外にも果実の大きな品種など様々見られる。到着した場所

そこには如何に原発が安全であるか、そして必要であるかが掲げられていたが、「あの日」以来、それをどう受けとめるべきか、今後どう考えるべきかを個人レベルでも国家レベルでも整理できていない現実がある。取りざたされた「原子力ムラ」、専門家集団ではあるが、故の事故、故の対応の悪さが浮き彫りとなった。ある一点にエッジを立てること、独自性と専門性を追求することは大切である。求道と言いつてもよい。しかし、それは排他的であることは違う。予見可能な想定外か事後の論議は虚しいものだ。歴史(体験)から得た先人の貴重な言葉さえも活かせなかった。

いうことはないが、一生懸命業務を遂行していてもどうしても起きしてしまうことがある。そこで大切なのはミスを隠さないこと。有り体に晒し、検証していくことで再発防止につなげていく必要がある。そして当事者に、ご家族に報告や謝罪をしていく。その中で見極めなくてはならないのは、そのミスが個人のミスか、システムとしてのミスかである。前者は個人の能力、資質の問題であるが、後者は組織全体が目こぼしをしてしまうケース、起こるべくして起きてしまったという問題である。このような考えを日々のなかで現場の職員、経営層などが共有できていないと、ちよつとしたところから組織の底が見えてしまうものである。

旅に出る。非日常に身を置き、見て聞いて触れて考える。するとまた日常が活性化化する。この旅も様々な人に出会い、沢山の刺激を頂いた。お供の三人も、まあ名物を腹に収めるのも旅の妙味であろう。何はともあれよい旅であったと耽っているとき、車窓には錦江湾に浮かぶ雄大な桜島が見える。一たび噴煙を上げれば、街の色すら変わり、生活に不便さをもたらすこともある。それでもこの地で暮らす人たちにとっては畏怖すべき存在にして象徴である桜島。最後まであの山の声を聴くことは叶わなかったが、再会も旅の楽しみである。再訪を期して鹿児島を後にした。

第82号

啓

佑

機関紙

本人も、ご家族もそれ位の感覚だと思ふ(本当はきせつ館、工芸館、新樹館、しぜん工房など様々あります)。区分という不確かなシステムで選り分けるのではなく、ご本人個々の状況や個性、人との相性、仕事への適性を我々プロが見極めて、ふる里学舎の各作業科へ所属してもらおう。そして日中活動に携

それを推し進めているのが今回の旅のお供、孫悟空であり、ご家族が手掛けている鹿児島は薩摩川内のミカン農園を見学しようと言うことになった。

「まずは基本をしつかり身に着けること。次に進むのはそれからいい。」

今までの迷いは晴れた。やはり地道な積み重ねなくして成功はないということだ。

「静風荘」でも、当初は不安や戸惑いはあった。援助のノウハウなど求められるものの違いは当然あり、時に命に直結する対応の重みに、改めて専門性の必要を感じた。命や健康を守ることにについては、知識や技術が必要である。その上に立った生活や日常の暮らしを考

【このシリーズ完】
(理事長)



見学後、土穂会多田美穂子理事長からピア宮敷の設立から現在に至るまでのお話を伺いました。設立当初は、地域の方々との確執や反対運

九月二十七日二度目の職員旅行にいかせていただきました。行先は、な、なんと沖縄！沖縄は高校の修学旅行以来です。青い空、白い砂浜、コバルトブルーのビーチでムフフ、なんて妄想を膨らませて浮かれる私。しかし、実際は極度な人見知りだったります…。

「旅先でひとりぼっちになるんじゃないか・…」など不安がよぎると、先輩職員のS藤さんは、「大丈夫だよ。他事業所の職員と

ながらも懸命に生きていく姿。最初で最後、許された意思は死ぬ場所を選べること。この場所での現実につきつてのことと聞いた時、自身の二十三年間を振り返ってみました。「明日やればいい」と言って諦めたこと、「私には出来ない」「私なんて」と理由をつけては何もしなかったこと。少し手を伸ばせば出来たこと、勇気を出せば出来たこと、たくさんありました。この場で亡くなった先人たちがいたからこそ、私たちは生きているというのを改めて体感し、生きている喜びに感謝しなければいけない」と深く考えさせられました。

の、嵐の予報とは異なるたかきりを隠しきれない面々が集まつてきました。理事長の挨拶のあと和気アイアイと楽しんでいる中、携帯で深刻にやりとりをしていた理事長から「明日の飛行機は飛びません。同じホテルでもう一晚過ぐせん。同じになります」一同「エエッ」頭の隅に追いやられていた台風が襲いかかったのです。しかし、人妻諦めも肝心。二日酔いでも寝ていられます。ということと事業所對抗やけのやんばりカオケ大会が始まりました。どの事業所も選ばれし精鋭、普段のあの人がというシーンの連続で腹は痛くなるは感心するの大喝采です。次はいよいよ小石川です。S藤先輩が「三味線に似たものを探してきて。」と無茶苦茶(笑)な命令はいつものことです。三味線に近いものといえば、トイレのモップ？ほうき？ピール瓶？「あれじゃない、これじゃない」と独り言を漏らしながら探し歩くと、玄関に三味線があるではありませんか！それを持つて小石川オンステージの始まりです

九月二十九日。沖繩本島台風十七号上陸。前日の深酒から目を覚ましてくれたのは、ビュービューと鳴り止むことのない風の音。ついに来たのか、とニュースを見ようとしたがテレビはつかず、停電していることに気が付きました。その凄まじさにはただただ驚かされるばかりでした。ホテルのすぐ横にあるプールは荒波をたて数十メートル先にあるビーチはもはや見えません。木々は、まるで斜めに生えているかのように横たわり続けています。関東で経験する台風とは全く別の次元でした。駐車場に目をやれば、昨日まで綺麗に整列されて停まっていた車が次々と向きを変え、隣の車に衝突。きつと車の持ち主も指をくわえて眺めているしかなかったのだと思

通勤電車。携帯を取り出し各々器用に通話。指先を動かして音楽を聴いたり新聞を読んだりメールを作成したり、そんな風景はもう珍しくありません。スマートフォン、フェイスブックやツイッターといったSNSを利用して簡単に情報交換や情報共有ができる便利な世の中になりました。デジタルに順応しながらもアナログの部分も大切にしたいかなければならないと考えられている今日この頃。アナログは時間も手間もかかりますが人と人の関わりの中では最も効果的だと思います。電話やメールに頼るのではなく実際に会うこと。手紙は、電子メールよりも何倍も時間がかかりますが、相手に気持ちや伝わるのではないのでしょうか。年末年始が近づき、今年も年賀状の季節がやって参りました。古き良き伝統。お世話になっている皆様に感謝の気持ちを込めて・・・。